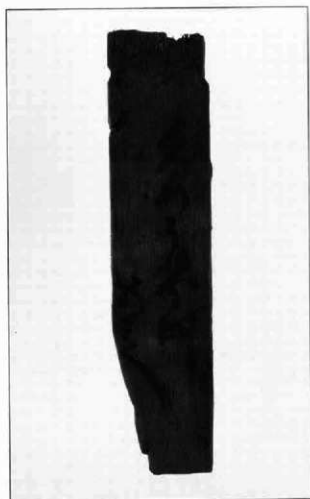


久留米城下町

魚屋町遺跡

第一・二次調査

久留米市文化財調査報告書 第123集



一九九七

久留米市教育委員会

序

恵まれた自然環境を有し、交通の要所に位置する久留米市は、福岡県南部地区の中枢都市として発展を続け、今も開発の福音は止むことなく響き、その景観は日々変貌しつつあります。

特に久留米市西部の景観は、戦国時代末期に毛利秀包がこの地を本拠地としたことに端を発し、以後田中吉政・忠政を経て、元和7年（1621）有馬豊氏が入国、本格的な城下町の整備を行ったことが基礎となっていますが、現在では城下町の面影を捜すことは困難となっています。幸い、地下には予想以上に近世城下町の痕跡が残され、久留米市教育委員会ではその復元に向けて久留米城外郭や町屋の発掘調査を進めています。

今回の発掘調査もその一環として行ったもので、開発行為に伴う事前の発掘調査ではありますが、旧魚屋町・築島町に暮らした庶民の息吹を伝える遺構・遺物が発見されています。中でも、魚屋町と築島町の境界を示す溝を発見したことにより、平成7年度に実施した呉服町遺跡の成果と併せて、魚屋町の東西範囲を確定出来たことなどは、久留米の城下町研究に貴重な知見を挙げ得たものと存じます。

それらの成果を収録した本書が、埋蔵文化財の理解・普及の一助となり、教育・研究にご活用いただければ幸いです。最後となりましたが、発掘調査に際しまして多大なご協力をいただきました、株式会社栗木工務店・植水ハイム株式会社、及び関係各位に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成9年1月31日

久留米市教育委員会

教育長 桑野善吾

例 言

1. 本書は久留米市城南町に所在する久留米城下町魚屋町遺跡の第1・2次調査の発掘調査概要報告書である。調査は植水ハイム株式会社久留米支店新社屋建設に先立つ事前の調査であり、発掘調査から報告書作成に至る費用は、株式会社栗木工務店が負担した。
2. 発掘調査は株式会社栗木工務店と久留米市教育委員会との委託契約に基づき、久留米市教育委員会が主体となって実施したもので、第1次調査を文化部文化財保護課の水原道範、第2次調査を同じく園井正隆が担当した。
3. 現地発掘作業は、第1次調査が平成8年2月7日～同年6月10日・第2次調査を平成8年9月25日～同年11月21日の期間に行い、整理作業は平成8年4月1日～平成9年1月31日の期間に行っている。
4. 本書に掲載した図面は調査担当者の他、久富澄江・梶島ミドリ・今村美津子・田中樹子・波辺しげ子・横原初美・松延千里・荒巻美智代が作成し、島中和子・副枝叶恵・能直美が浄書した。遺構写真は調査担当者、出土遺物の写真は園井が撮影した。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系を基に作成しており、図中の方位は全て座標北を示す。また、遺構の略表記は次の通りである。
SD…溝、SK…土坑、SE…井戸、SP…ピット、SX…その他の遺構
6. 今回の調査に関係する諸資料は久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
7. 魚屋町遺跡の遺跡調査番号は第1次調査が199533、第2次調査が199623である。遺物一覧表で示す5桁の遺物登録番号は遺跡調査番号を省略したものであり、本文・遺物写真中の番号は遺物登録番号を示す。
8. 本書はⅠ～Ⅳ・Ⅵを水原、Ⅴを園井が執筆し、編集は園井の補助を受けて水原が担当した。

目 次

Ⅰ. はじめに	1
Ⅱ. 位置と環境	2
Ⅲ. 調査の概要	3
Ⅳ. 第1次調査	5
Ⅴ. 第2次調査	24
Ⅵ. まとめ	36

I. は じ め に

1. 調査の経過

魚屋町遺跡の発掘調査は、平成7年10月6日、地権者である株式会社栗木工務店より久留米市城南町13番地19～24、13番地48の7筆内における埋蔵文化財の有無についての確認依頼書が久留米市教育委員会文化財部文化財保護課に提出された(対象面積1535㎡)ことに始まる。これに対して文化財保護課では対象地の約25m西側の地点において実施した呉服町遺跡の調査成果などから、対象地には近世久留米城下町の町屋遺構が存在しており、また、開発規模も大きなものであることから発掘調査を行う必要がある旨を回答。その後、地権者側と協議を重ね、同年12月上旬には駐車場部分などを除いた事務所建設部分614㎡分について発掘調査を行うことで協議が成立。平成8年1月24日には調査依頼書、「法57条の2」による発掘届が提出された。これに対して同年2月5日には地権者と久留米市の間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を取り交わし、同年2月7日より第1次調査を開始したが、その後、3月22日に地権者側より開発計画が全面的に変更された旨の通知がなされた。文化財保護課ではこれに対して、当初建物が建設される予定であった対象地西半分から、対象地のほぼ全面を調査の対象とする調査計画に変更したが、この時点では既に平成8年度前半の調査計画が出来ており、他の調査との兼ね合いから追加分については第1時調査に引き続き調査を行うことが出来ない旨を回答。再度協議を重ねる運びとなった。この協議は3月29日に成立。4月1日には平成8年度分の委託契約を取り交わし、6月10日には第1次調査が終了した。

第2次調査は9月25日より行い、同年11月21日に終了している。

2. 調查体制

今回の調査に係る調査体制は以下の通りである。

調査委託者：株式会社 栗木工務店 代表取締役 竹下 實
 営業部長 石井 正

調査主体： 久留米市教育委員会文化部文化財保護課
教育長 桑野善吾 部長 川原幸男

調査総括： 課長 古賀幸男 主査 萩原裕房 埋蔵文化財主査 櫻井康治

調査庶務：古賀直喜

調査担当： 園井正隆 水原道範

發掘調査従事者

今村美津子・梅崎たえ子・岡 富士子・山下 久枝・高良トミ子・山田 治代・良永 洋子・
馬場 幸子・古岡登美子・吉村 智子・野嶋 良枝・中野 悦子・久富 澄江・関 マスミ・
梶島ミドリ・梅崎 恵美・過能ツルノ・甲斐田久美子・熊丸千恵・中島 英樹・国武 三蔵・
水原 昭範・高岡 威・山下 昭洋・香月 清子・小林美佐代・江崎 清美・山崎キヨ子・
緒方ヨシ子・吉田 常代・財木美智子・大石マサコ・田中レイ子・大塚チズ子・田中 樹子・
櫛原 初美・藤木 幸子・丸山 幸・渡辺しげ子・渡邊やつ子・荒巻美智代・松延 千里・
井上嘉代香・中尾美保子・半田 純香・鬼塚 成利・神代英一郎

整理作業従事者：中林貴美子・立石恵美・小川執津子・副枝叶恵・龍直美

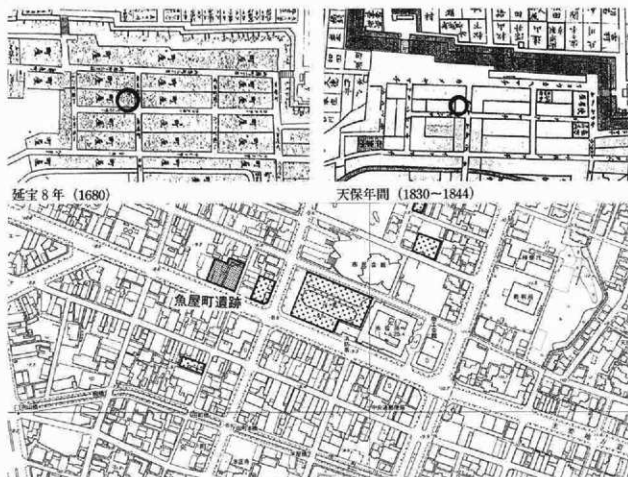
II. 位置と環境

魚屋町遺跡は久留米市城南町に所在する。調査地付近は、東側に久留米市役所・裁判所・法務局などが存在する官庁街、西側にはJR久留米駅を中心にゴム製品を生産する工業地区、南側には問屋街を中心とした商業地区、北側は久留米大学医学部などが所在する文教地区に囲まれ、民家が密集した場所である。

調査地は南にある池町川から北側へ延びる低地部に所在しており、標高8m前後。台地上にあるJR久留米駅や久留米市役所旧館付近とは約2mの標高差を測る。

近世の久留米城下町についての詳細は、『三本松町遺跡』（久留米市文化財調査報告書第74集）、及び『呉服町遺跡』（同第104集）の各報告書を参照して頂きたい。ここでは対象地付近に限定する。元和7年（1621）有馬豊氏が筑後北半分の領主として久留米を居地と定め、旧領主毛利秀包や田中吉政・忠政時代の町を改変し、城や城下町の本格的整備を開始したことに始まる。この整備は寛永期（1624～1644）にはほぼ完成したものと見られ、以後は城下町が拡大しながら明治を迎えている。

今回の調査の対象である魚屋町・築島町は、久留米城外郭南面に所在し城下を南北に走る魚屋町筋と東西に走る築島町筋に沿って短冊形の地割りが設定された両側町である。両町は有馬豊氏の城下町建設の初期段階に成立したと推定され、町内が全焼する程の火災に度々遭いながらも大きな改変を受けることなく明治を迎えている。調査地は大正～昭和初期には町屋の景観を失ったものらしく、戦前は大規模な料亭が建てられ、さらに、戦災や区画整理を受けた後には城南町の一部として町名も失われ、工場や倉庫となり、調査前には共同住宅・駐車場・印刷工場として使用されていた。



第1図 調査地周辺変遷図

Ⅲ. 調 査 の 概 要

1. 調査の概要

a. 第1次調査

第1次調査は当初の開発計画に基づき、対象地の南西部と西半分に調査区を設定。調査直前の旧家屋解体時に埋められていた町境溝の一部が発見されたことから旧町域の推定が可能となり、便宜上対象地南東部に設定した調査区を魚屋町地区、西半分に設定した調査区を築島地区とした。第1次調査では対象面積1,535㎡の内、魚屋町地区94㎡・築島町地区364㎡を調査している。

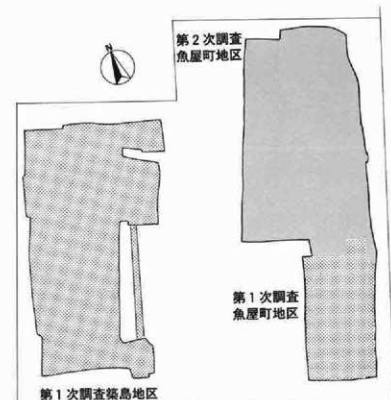
調査は平成8年2月7日に重機による掘り下げから開始された。まず、築島地区南端を掘り下げ層位を確認。この際に現地表から約70cm下の多量の炭化物が混入する焼土層を検出。まずこの層を掘り広げたところ幕末期の胞衣壺5基を検出したが、この層は著しく攪乱されていたため、さらに50cm掘り下げ、第2火災層面を調査することとし、この火災層上面のレベルで掘り広げた。本書中で築島地区上層としたものは、全てこの面で検出された遺構・遺物である。上層の調査は5月21日に終了。翌22日に30cm下の層迄重機で掘り下げ、下層の調査を開始、6月10日に終了している。

魚屋町地区は2月9日より重機による掘り下げを行い、こども地表下約1mで検出された火災層面を掘り広げ、この面を上層とした。その後は人力で下層まで掘り下げ、6月4日に調査を終了。

b. 第2次調査

第2次調査は開発計画の変更に伴い、魚屋町地区の未調査部分265㎡を調査したものである。こども幕末～明治から近世前期に至る3層の調査を行い、町屋の屋敷地割について貴重な知見が得られている。調査期間は平成8年9月25日～同年11月21日。

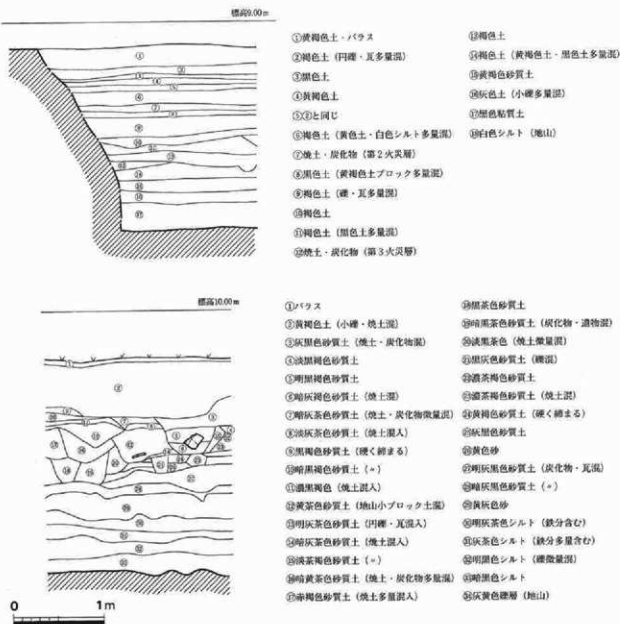
整理作業は平成8年4月1日より開始し、平成9年1月31日まで行った。



第3図 調査地周辺状況(東から)

第2図 調査区設定状況図 (1/400)

2. 基本層序



第4図 築島地区・魚屋町地区基本土層図 (1/40)

第4図上は築島地区西壁南端部に設定したトレンチの土層である。築島地区では上から順に昭和20年8月11日の空襲による火災層、幕末～明治頃の火災層、18世紀後半代と推定される火災層と3つの火災層が検出され、年代推定の手懸かりとなった。上層検出面は⑫層上面、下層検出面が⑮層上面に当たる。

第4図下は魚屋町側の土層で、第2次調査トレンチ東壁北端部における土層である。上層遺構は③層上面で検出、中層は⑫層上面で検出、下層が⑲層上面で検出されたものである。

IV. 第 1 次 調 査

1. 遺構・遺物の概要

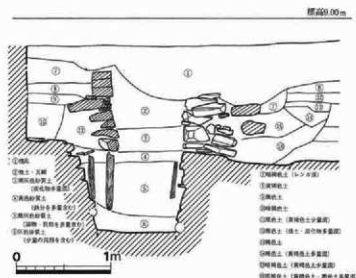
a. 築島町地区上層

築島町地区上層では南北溝1条、土坑19基、井戸5基、池状遺構1、ピット群などを検出した。調査区南部は建物遺構が検出されることを予想していたが、基礎石の可能性のある石7点と、基礎石抜跡1を検出したのみで、建物の復元を成し得ていない。

また、築島町地区でコンテナー103箱分、魚屋町地区でコンテナー37箱分に及ぶ出土遺物については第1～6表を参照されたい。



第5図 築島地区上層全景（北東から）



第6図 SD1南端部土層図 (1/40)



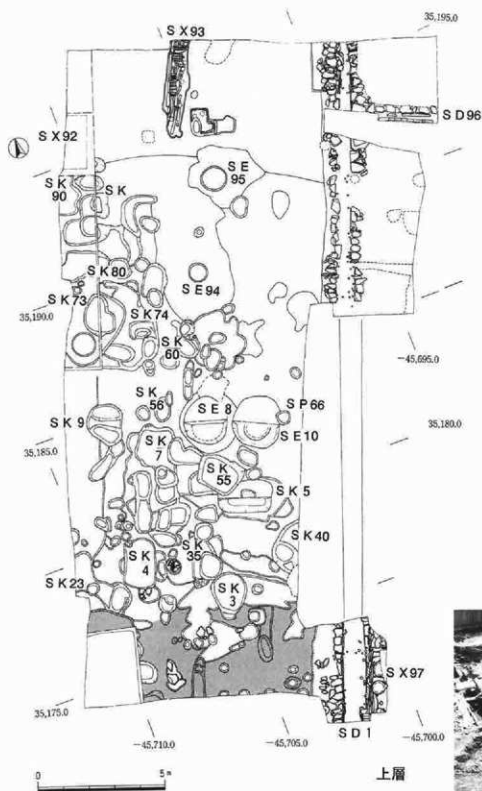
第7図 SD1南端部（北から）



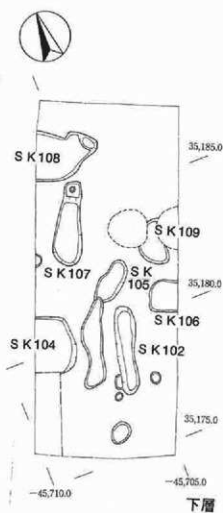
第8図 SD1北端部石垣基礎（西から）

溝

SD1（第6～8図） 調査区東端部で約27mを検出した南北溝。魚屋・築島町との境界をなすものと考えられる溝で、この溝より東側が魚屋町、西側が築島町となる。溝の両側には石垣を組み上げ、壁面を強化しているが、この石垣は最底部に径15cm程の松材の丸太で筏地形を組み、その上に厚さ3cm程の板材を敷いて基礎とし、さらにその上に幅30～40cm、厚さ10cm前後の板状の片岩を積み上げたものである。石垣は土層や石の積み方から見れば、魚屋町側では1度約50cm築島町側に石垣を張り出す形で積み加えられているが、これに対して築島町側では2度土地の高上げに応じて積み加えられており、当初の石垣が組まれた18世紀代には築島町側の土地が魚屋町側よりも一段低かったことが推定される。さらにその上にはレンガが6段積み、この溝が相当長期間利用されたことが窺えるが、最後は昭和20年の久留米空襲の際に生じた瓦礫によって埋め尽くされている。溝幅は当初の石垣の段階で約1.1m、石垣が追加された段階とレンガ壁になった段階で80cmを測り、深さは50～70cmを測るものと想定される。現地表から最底部までは約1.9m。走行方位はN-20°-E。



第9図 築島地区上層・下層遺構配置図 (1/150)



第10図 築島地区下層全景 (北東から)



S D 96 調査区北西部で検出した東西溝。上部はマンション建物基礎によって失われ、基底部のみが残されていた。北側は S D 1 と同様に片岩で石垣を組んでおり、1 段分が残存。南側は 2 段分が残存するレンガ積みである。東側は調査区外へ延びているが約 3.4 m 分を検出。幅 20cm。底面レベルは東側から西側に向かって約 20cm の比高差で低くなり、S D 1 に接続している。この溝は焼土・炭化物で埋め戻されており、埋土中からは戦前の料亭で使用されていたと見られる白磁の盃が多量出土している。

土坑

S K 3 調査区南部で検出した。南北長 1.6m、東西幅 1.3~1.6m、深さ約 30cm を測り、平面形は楕円形を呈する土坑である。底部は南側から北側に向かって緩やかに傾斜しており、僅かに焼土・炭化物が混入した黒褐色土中によって一度に埋め戻されている。

S K 4 調査区南西部で検出。南北長 2.0m、東西幅 1.3m、深さ約 30cm を測る。平面形は長方形を呈する。底面はほぼ平坦。埋土は褐色土であるが、埋土中には多量の鉄滓・鞆羽口・炭が含まれており鍛冶に関係する廃棄土坑であったことも考えられる。

S K 5 調査区南部で検出。東西長 2.1m、南北幅 1.5m、深さ 60cm。平面形は長方形。埋土は褐色土で一度に埋め戻されている。

S K 7 調査区南部で検出。南北長 4.0m、東西幅 2.1m、深さ 20~50cm を測る不整形土坑である。明褐色土の埋土からなる上層と、暗褐色土からなる下層に大別して掘り下げているが、下層は上層遺構によって切り込まれた別遺構と考えられる。

S K 9 調査区中央部で検出。南北長 1.6m、東西幅 1.3m、深さ 25cm を測り、平面形は楕円形を呈する。埋土は炭化物が多量混入した灰色土からなる。

S K 23 調査区南西部で検出。遺構は調査区外へ延びているが、南北長 2.3m 分、東西幅 2.1m 分を検出、深さは 20cm を測る不整形の土坑である。埋土は焼土と黄褐色土ブロックが僅かに混入した明褐色土。



第11図 S K 35遺物出土状況(東から)

S K 35 調査区南部で検出。北端部と南端部を他の遺構によって切り込まれているが、南北長 1.8m、東西幅 0.9m、底面は南側から北側に向かって深くなっており、深さは 30~40cm を測る。埋土は暗褐色土。

S K 40 調査区南部で検出。遺構は調査区外へ延びているが、南北長 2.1m 分、東西幅 1.0m 分を検出、深さは 30cm を測り、平面形は楕円形と推定される。埋土は拳大の円礫を多量含んだ明褐色土。

S K 55 調査区南部で検出。S K 5 を切り込む土坑である。東西長 1.7m、南北幅 1.3m を測り、平面形は長方形を呈する。深さ 30cm。底面はほぼ平坦、埋土は黒褐色土。

S K 56 調査区中央部で検出。南北長 90cm、東西幅 60cm を測る。深さ 40cm。平面形は楕円形で、底面はほぼ平坦。埋土は黒褐色土。

S K 60 調査区中央部で検出。南北長 1.1m、東西幅 90cm、深さ 70cm を測る。埋土は黒褐色土。

S K 73 調査区中央西部で検出。S E 79 掘方を切り込む土坑。南北長 1.6m、東西幅 1.2m を測る。埋土の褐色土中からは、パンコンテナ 4 箱分に及ぶ大量の鉄滓が出土しており、S K 4 と同様に鍛冶関係の廃棄土坑の可能性がある。検出面より約 50cm 迄掘り下げたが、隣接する S E 79 掘方が中位以下は空洞となっており、崩落の危険が生じたため完掘せず埋め戻している。

S K 74 S E 79とS K 73よりも先行する土坑。南北3.6m、東西2.2m分を検出した。深さは40cmを測る。埋土は黒褐色土。

S K 80 調査区中央部で検出。南北長80cm、東西幅70cm、深さ40cmを測る。平面形は楕円形。

S K 89 調査区北西部で検出。一辺1.2mの方角を呈する土坑。深さ55cm。埋土は黒色土。

S K 90 調査区北西部で検出。西側は調査区外へ延びているが、南北1.6m分、東西80cm分を検出した不整形な土坑である。深さ50cm。埋土は黒褐色土。

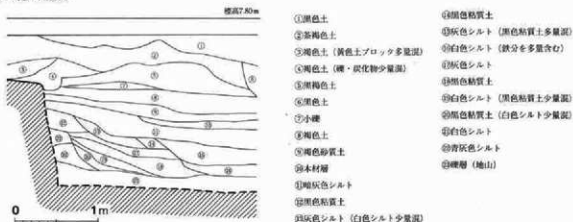
井戸

S E 8 調査区中央部で検出。径1.7m前後の円形に掘られた井戸で、検出面より約1.3m掘り下げたところで漆喰製径1mの井戸枠を検出、その後40cm掘り下げ、完掘はしていない。幕末～明治頃に使われたものと考えられる。

S E 10 S E 8の東側に掘られた井戸。上部は一辺2m前後の隅丸方形に掘られ、検出面から1.2m付近に段を有し、それ以下は径約1mの円形に掘られている。検出面から1.6m迄掘り下げたが、井戸枠は検出されていない。S E 8よりも後出する。

その他、明治以降のものと見られる3基の井戸が検出されたが、掘り下げは行っていない。S E 79は径90cmの漆喰製井戸枠を有し、焼土・炭化物で埋め戻されていた。S E 94は径80cmの漆喰製井戸枠が4段分重ねられており、片岩製の板状石材で蓋をし埋められていた。深さ約3.5m。S E 95は径80cmの漆喰製井戸枠が3段分重ねられていたが、さらにはその下は桶状の木枠が置かれていた。深さ約3m。

その他の遺構



第12図 SX92断面土層図 (1/40)



第13図 SX92土層状況 (東から)

S X 92 (第12～14図) 調査区北西部に設定した補助トレンチで検出された東西に延びる溝状遺構。調査区外へ延びるため全容は不明であるが、検出面から約1m掘り下げたところで南北4.3m分を検出。深さは約80cm。黒灰色粘質土中に多量の砂や腐食土が混入する自然体積の状況が観察されるが、その上部は5cm程の厚さに腐食した板材等が堆積、さらにその上には褐色土が積み、埋め戻されている。木材層より下層では大型獣の背骨と見られる骨片が1点出土したのみである。木材層からは9枚重ねられた古寛永通宝、17世紀前半の磁器染付皿 (238) 1点、平瓦1枚、木簡 (250 判読不能)



第14図 木棺内遺物出土状況(南から)

1点が出土しており、この溝の下限は17世紀前半代と推定される。これらの状況から見て、呉服町遺跡SX5堀状遺構と同様の溝の可能性が高い。

SX93 調査区北端部で3.5m分を検出。幅約90cmの掘方中に、径10～15cm程の杉材と見られる丸太を組み合わせて筏地形を行っている。4.5m西側の調査区西壁面中にも同規模の筏地形が検出されており、一対の基礎である可能性もある。明治～昭和初期頃の遺構である。

b. 築島地区下層



第15図 SK102遺物出土状況(東から)

上層調査終了後、上層調査区の南部約80m分について、第15層上面迄重機で約50cm掘り下げ、第15層上面を下層とした。下層では土坑8基、ピット群を検出。

土坑

SK102 (第15図) 調査区南部で検出。南北長3.5m、東西幅70cm、深さ40cmを測り、平面形は楕円形状を呈する。埋土の黒色粘質土中からは桶・折敷・下駄・漆碗などの木製品・竹製品が多量出土、共伴する陶磁器から17世紀中～同末頃に比定される。

SK103 SK102の西側で検出された土坑。南北長3.7m、東西幅60～90cm、深さ15cmを測る平面楕円形状の土坑。遺物は桶などの板材が出土したのみ。SK105よりも後出する。

SK104 SK104の西側で検出。遺構は調査区外へ延びているが、南北長2.2m分、東西幅1.7m分を検出。深さ55cm。遺物は漆碗3点の他、下駄・桶など木製品、陶磁器など17世紀後半代の遺物が出土。

SK105 SK103によって切り込まれる土坑。南北1.7m、東西85cm、深さ40cmを測り、平面形は楕円形状を呈する。漆碗・下駄各1点の他、陶磁器・煙管などが出土。

SK106 調査区東端部中央で検出。遺構は調査区外へ延びるが、南北1.5m、東西1.3m分を検出。深さ20cm。遺物は下駄3点、黒漆塗折敷などの板材、17世紀後半代の磁器碗が出土。

SK107 (第19図) 南北長3.3m、東西幅1.1m、平面形は楕円形状を呈する土坑である。底面は北部が一段高くなっており、深さは30～60cmを測る。遺物は宝永通宝1点、木筒・桶・下駄などの多彩な木・竹製品、18世紀前半代～同中葉頃に比定される陶磁器が出土している。



第16図 宝永通宝拓影(原寸)

限定される資料である。

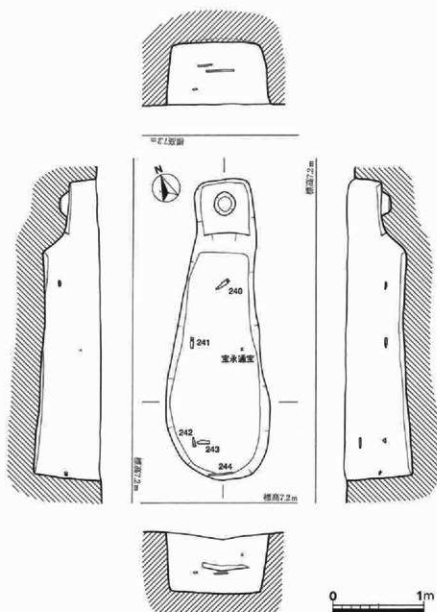


第17図 宝永通宝出土状況(東から)



第18図 木筒出土状況(東から)

宝永通宝は(第16～17図)は上部が欠損しているが、銭径37.60mm、内径27.71mm、銭厚1.16～1.24mmを測る。宝永5年(1708)初鑄の十文銭であるが、翌年1月には通用停止となっており、通用期間が極めて



第19図 S K 107実測図 (1/40)

深さは40cm。木簡・下駄・漆碗・桶・折敷などの木製品が17世紀前半代～同中葉の陶磁器と共に多量出土している。



第20図 S K 108遺物出土状況 (東から)

ば059型式。249は矢羽根状の柵目の板材。両面に「ハ」状の断続する墨痕がある。

木簡 (第29図12) は6点出土。240は柵目材で上部に穿孔されている。木簡学会分類の051型式。表面には「□□五拾目」、裏面に「□七月廿二日・□両替町平右衛門…」と記載される。241も柵目材で上部が穿孔される032型式。表面には「井筒屋□右衛門…」、裏面は判読不能。242も柵目材。033型式。両面に判読不能。243も柵目材。033型式。片面が「くるめうおや町・新兵衛」、もう片面は判読不能。244は一辺1.3cmの角材の一面に「寛□□□□□・二月十七日」とある。065型式。245は整理作業中に判明したもので、これも柵目の板材の一端に2ヶ所、もう一端に1ヶ所穿孔され、両面に墨痕があるが、判読できない。

S K 108 (第20図) S K 107の北側で検出した土坑。遺構は調査区外へ延びているが東西2.2m分、南北1.9m分を検出。

木簡 (第29図13) は4点出土。246は柵目材。065型式。長辺1.5cm、短辺1.0cmの断面長方形の角材の両端部に切り込みが入り、長辺面には表に「寛永□□□□七月廿六日長兵衛」の記載があり、裏面には一方の縁寄りに径2～3mmの穴が13ヶ所1.5～2.0cmの間隔で穿たれているが、この穴は貫通していない。折敷側板の一部もしくはその板材の転用品と推定される。247も柵目材。051型式。片面のみ墨痕があるが、判読不能。

248はその形状から木簡としたもので、墨痕はない。木簡ならば059型式。249は矢羽根状の柵目の板材。両面に「ハ」状の断続する墨痕がある。

SK109 SE8とSE10に切り込まれているが、南北長1.8m、東西は1.1m分を検出。深さ15cm。平面形は楕円形状を呈する。

c. 魚屋町地区



第21図 魚屋町地区上層検出遺構（北から）



第22図 魚屋町地区中層検出遺構（北から）



第23図 魚屋町地区下層検出遺構（南から）

魚屋町地区は現地地表約1mで火災層を検出。この火災層（厚さ約10cm）を調査した後、人力で順次下層へ掘り下げた。ここでは火災層検出面を上層、火災層下の褐色土を基調とした層を中層、褐色土の下で検出される黒褐色土層を下層として報告する。なお、調査地の東側のみ白色砂層が褐色土と黒褐色土の間に約3cmの厚さで存在する。上・中・下層の平均標高は約7.7・7.4・7.2mを測る。

上層

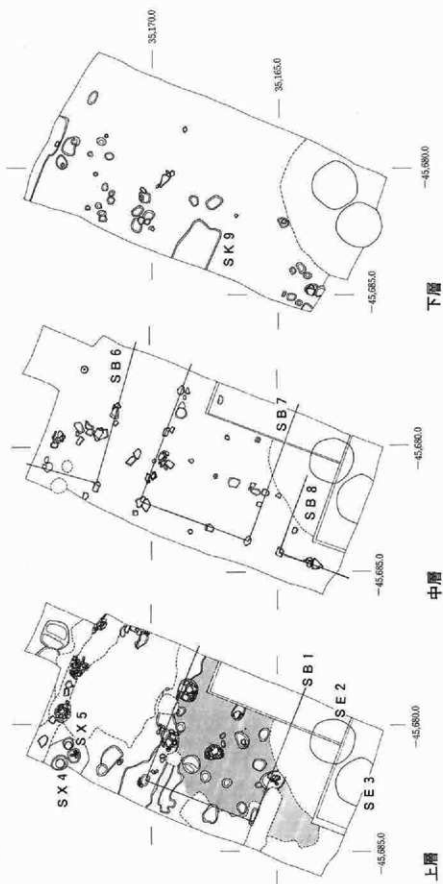
火災層中に包含される遺物から18世紀後半頃の町屋遺構が検出されることを予想していたが、19世紀～昭和50年代の擾乱が著しく、建物の状況は明確ではない。

SB1 調査区中央部から南部にかけて基礎石を検出。調査区外へ延びる東西棟建物と推定される。基礎石は30～50cmの方形、または楕円形の石材を用い、1間約2mの間隔で据えられ、南北2間（4.3m）、東西は2間分が検出されている。基礎石は火災層を約15cm掘り込み、拳大の栗石を入れて安定させている。

SE2・3 調査区南東側に所在する井戸。共に幅約20cmの板材を桶状に組んだ木枠を井戸枠として用いる。昭和20年8月11日の空襲を原因とした火災によって生じた瓦礫・焼土・炭化物を投げ込み、埋め戻している。SE2は径1.7m、SE3は径1.8mの規模を有する。

SX4・5 調査区北東部で検出。SX4は径60～70cm深さ25cmを測る楕円形の掘り方に、内径30cmの陶器製土管を直立させた遺構である。土管内には米粒大の炭化物が詰まっていたが、土管内面や掘り方底部には焼けた痕跡は観察されていない。SX5も一辺45cm、深さ20cmの隅丸方形の掘り方にSX4と同様に内径25cmの陶器製土管を直立させて据えているが、SX5の土管内は黄褐色粘質土が詰まっていた。この土管内や掘り方底部にも焼けた痕跡はなかった。

その他、調査区北部の大半を占める擾乱は19世紀以降のもので、拳大～人頭大の石が大量に投げ込まれていた。また、北端部を東西溝状に走る擾乱は、昭和30～40年代に建てられていた倉庫の基礎によるものである。



第24图 鱼尾河地区上・中・下層通称配置图 (1/100)

中層



第25図 SB 7北側基礎石検出状況(西から)

火災層を除去した後に検出した基礎石群から3棟の東西棟建物を推定。この3棟の建物は基礎石上面の標高がほぼ7.6m台で揃うものである。

SB 6 調査区北部で検出。上層からの攪乱がこの層まで達しており、基礎石が失われた部分が多いが、40cm前後の板石の他、石臼を転用して基礎石とする。北側の基礎石の残存状況から判断すれば、東西柱筋の1間は約1.4m程と推定される。南北幅については調査区北側へ広がるため不明。

SB 7 SB 6の南側に1.9m間隔で検出した。40～50cmの板石を基礎石としているが、東西柱筋は2間分を検出。基礎石は1間約2m間隔で配置されている。南北幅は4.2mを測る。上層検出のSB 1とほぼ同じ場所に建てられており、SB 1はこの建物を火災後に立て直したものと推定される。

SB 8 確証はないが、調査区南西部で検出した基礎石と地割の状況から推定した建物である。SB 7とは1.7mの間隔を置く。

下層



第26図 下層遺物出土状況(北から)

SK 9と調査区西側に集中するピット群の他には遺構は検出出来なかったが、調査区中央部、及び南西隅ではそれぞれ中層基礎石を除去した後、下層基礎石を検出している。この基礎石群は上面の標高が7.4m台を測るもので、30～50cmの自然石が使用されている。基礎石は中層基礎石とほぼ同位置で検出されたことから、調査区中央部検出の基礎石が中層SB 7、南西部検出の基礎石が中層SB 8の前段階の建物と推定される。

SK 9 調査区中央部で検出。遺構は調査区外へ延びているが、東西1.7m分、南北1.4m、深さ15cm。褐色土の

埋土中からは17世紀後半～18世紀前半の陶磁器や下駄3点などが出土しており、中層段階で掘られたものと見られる。

2. まとめ

以上、第1次調査検出遺構・遺物について概観した。築島地区上層では18世紀後半～19世紀代の遺構・遺物が多く検出されたことから判断して、調査区南部で検出した火災層は、『米府年表』に見られる寛政11年(1799)11月28日に築島町・今町の90軒を焼いた火災によるものである可能性が高い。下層は17世紀中葉～同後半と推定されるが、出土した木簡からは年号を示す「寛永」、町名を示す「両替町」「うおや町」、町人名が記される「井筒屋」など、城下町成立期の町屋や商人活動の具体的様相を示す貴重な資料が得られたことは大きな成果であった。町境溝SD 1や魚屋町地区屋敷割については、Ⅳ章を参照頂きたい。



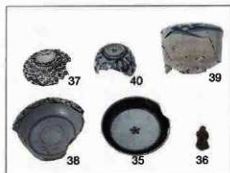
(1) S D 1 出土遺物



(2) S D 1 出土遺物



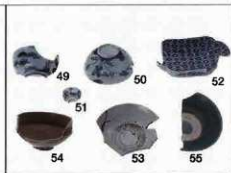
(3) S D 1 出土遺物



(4) S K 3-5 出土遺物



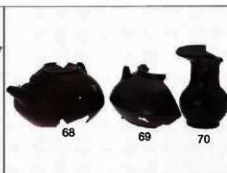
(5) S K 7 出土遺物



(6) S K 7 下層出土遺物



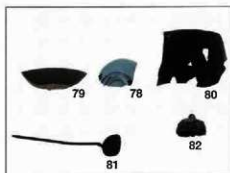
(7) S K 9 出土遺物



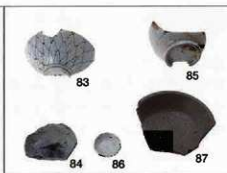
(8) S E 10 出土遺物



(9) S K 23 出土遺物



(10) S K 35 出土遺物



(11) S K 40 出土遺物



(12) S K 55 出土遺物



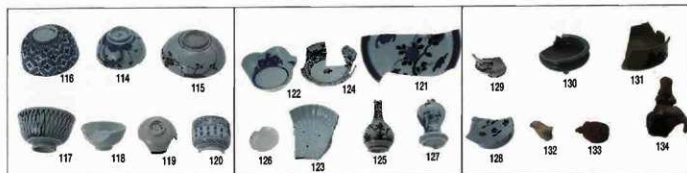
(13) S K 56 出土遺物



(14) S K 60 出土遺物



(15) S K 66 出土遺物



(1) S K 73出土遺物

(2) S K 73出土遺物

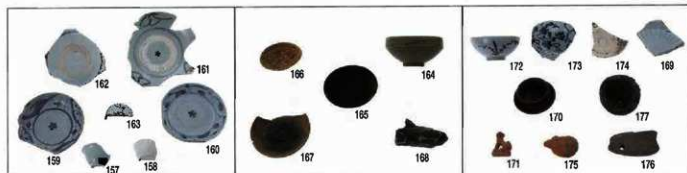
(3) S K 73出土遺物



(4) S K 73出土遺物

(5) S K 74出土遺物

(6) S K 74出土遺物



(7) S K 80出土遺物

(8) S K 80出土遺物

(9) S K 81出土遺物



(10) S K 89出土遺物

(11) S K 90出土遺物

(12) S K 102・104出土遺物



(13) S K 105出土遺物

(14) S K 106出土遺物

(15) S K 107出土遺物



(1) S K 107出土遺物

(2) S K 108出土遺物

(3) 胞衣壺①



(4) 胞衣壺②

(5) 胞衣壺③

(6) 胞衣壺④



(7) 胞衣壺⑤

(8) 北端部検出面西洋磁器

(9) 同裏面



(10) S X 92木材層出土磁器

(11) 攪乱出土遺物

(12) S K 107出土木簡



(13) S K 108出土木簡

(14) S K 108出土木簡

(15) S X 92木材層出土木簡



(1) 火災層出土遺物

(2) 火災層出土遺物

(3) 火災層出土遺物



(4) 褐色土出土遺物

(5) 褐色土出土遺物

(6) 褐色土出土遺物



(7) 褐色土出土遺物

(8) 黒褐色土出土遺物

(9) 黒褐色土出土遺物



(10) 黒褐色土出土遺物

(11) 黒褐色土出土遺物

(12) 黒褐色土出土遺物



(13) SK1出土遺物

(14) SK1出土遺物

(15) SP3出土遺物

第2表 出土

[illegible]

第3表 出土遺物一覧表③

図録 番号	出土 遺物 番号	器 種	法 量	文 様	所 在	年 代	備 考	通 用 番号	種 類	法 量	装 飾	所 在	年 代	備 考
201	SK0505	銅器 小皿	4.4 2.8 1.7 銅板	空白文	紀前 17C後半	00001	陶器・砂	00001	銅器 小皿	13.9 10.2 2.8 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00051	
202	SK0506	銅器 小皿	5.6 — — 銅板	縦線文	紀前 17C	00002	陶器・砂	00002	銅器 小皿	13.5 10.3 2.7 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00052	
203	SK0507	銅器 小皿	5.6 — — 銅板	縦線文	紀前 17C	00003	陶器・砂	00003	銅器 小皿	13.5 10.3 2.7 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00053	
204	SK0508	銅器 小皿	25.6 7.6 6.0 銅板	横線文	紀前 17C後半	00004	陶器・砂	00004	銅器 小皿	13.8 10.3 3.0 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00054	
205	SK0509	銅器 小皿	4.9 3.0 1.9 銅板	空白文	紀前 17C後半	00005	陶器・砂	00005	銅器 小皿	13.8 10.3 3.2 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00055	
206	SK0510	銅器 小皿	11.3 6.2 6.1 銅板	花文	紀前 17C後半	00006	陶器・砂	00006	銅器 小皿	13.8 10.3 2.8 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00056	
207	SK0511	銅器 小皿	8.8 — — 銅板	空白文	紀前 17C	00007	陶器・砂	00007	銅器 小皿	13.6 10.3 3.2 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00057	
208	SK0512	銅器 小皿	9.0 4.0 4.3 銅板	長竹文	紀前 17C	00008	陶器・砂	00008	銅器 小皿	13.6 9.9 3.2 銅板	七宝山水文	紀前 17C後半	00058	
209	SK0513	銅器 小皿	8.6 3.1 4.2 銅板	長竹文	紀前 17C	00009	陶器・砂	00009	銅器 小皿	— 4.6 — 銅板	長竹文	紀前 17C後半	00059	
210	SK0514	銅器 小皿	9.0 3.8 4.3 銅板	長竹文	紀前 17C	00010	陶器・砂	00010	銅器 小皿	11.4 6.1 2.6 銅板	山水文	紀前 17C後半	00060	
211	SK0515	銅器 小皿	10.7 — 4.9 銅板	空白文	紀前 17C	00011	陶器・砂	00011	銅器 小皿	11.4 6.1 2.6 銅板	山水文	紀前 17C後半	00061	
212	SK0516	銅器 小皿	12.6 4.3 4.3 銅板	空白文	紀前 17C	00012	陶器・砂	00012	銅器 小皿	10.2 6.4 6.1 銅板	空白文	紀前 17C後半	00062	
213	SK0517	銅器 小皿	13.2 4.6 3.6 銅板	空白文	紀前 17C後半	00013	陶器・砂	00013	銅器 小皿	9.4 3.7 5.5 銅板	空白文	紀前 17C後半	00063	
214	SK0518	銅器 小皿	2.2 2.0 1.2 銅板	空白文	紀前 17C後半	00014	陶器・砂	00014	銅器 小皿	10.1 4.7 6.6 銅板	空白文	紀前 17C後半	00064	
215	SK0519	銅器 小皿	11.6 — 7.3 銅板	空白文	紀前 17C後半	00015	陶器・砂	00015	銅器 小皿	11.4 4.7 6.6 銅板	空白文	紀前 17C後半	00065	
216	SK0520	銅器 小皿	— 8.3 4.0 銅板	空白文	紀前 17C後半	00016	陶器・砂	00016	銅器 小皿	13.4 5.3 3.8 銅板	空白文	紀前 17C	00066	
217	SK0521	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00017	陶器・砂	00017	銅器 小皿	14.4 5.4 2.6 銅板	空白文	紀前 17C	00067	
218	SK0522	銅器 小皿	14.4 7.2 3.3 銅板	空白文	紀前 17C後半	00018	陶器・砂	00018	銅器 小皿	11.4 5.4 2.6 銅板	空白文	紀前 17C	00068	
219	SK0523	銅器 小皿	— 4.1 — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00019	陶器・砂	00019	銅器 小皿	11.4 5.2 3.9 銅板	空白文	紀前 17C	00069	
220	SK0524	銅器 小皿	9.9 3.5 5.3 銅板	空白文	紀前 17C後半	00020	陶器・砂	00020	銅器 小皿	10.6 4.8 7.2 銅板	空白文	紀前 17C	00070	
221	SK0525	銅器 小皿	— 3.4 4.4 銅板	空白文	紀前 17C後半	00021	陶器・砂	00021	銅器 小皿	11.7 4.3 6.3 銅板	空白文	紀前 17C	00071	
222	SK0526	銅器 小皿	2.3 2.3 6.1 銅板	空白文	紀前 17C後半	00022	陶器・砂	00022	銅器 小皿	11.6 4.8 6.4 銅板	空白文	紀前 17C	00072	
223	SK0527	銅器 小皿	12.4 4.9 6.8 銅板	空白文	紀前 17C	00023	陶器・砂	00023	銅器 小皿	8.2 5.1 7.5 銅板	空白文	紀前 17C	00073	
224	SK0528	銅器 小皿	6.7 4.8 3.1 銅板	空白文	紀前 17C	00024	陶器・砂	00024	銅器 小皿	8.2 5.1 7.5 銅板	空白文	紀前 17C	00074	
225	SK0529	銅器 小皿	10.6 — 2.8 銅板	空白文	紀前 17C	00025	陶器・砂	00025	銅器 小皿	8.2 5.1 7.5 銅板	空白文	紀前 17C	00075	
226	SK0530	銅器 小皿	15.6 5.5 7.3 銅板	空白文	紀前 17C後半	00026	陶器・砂	00026	銅器 小皿	8.2 5.1 7.5 銅板	空白文	紀前 17C	00076	
227	SK0531	銅器 小皿	25.6 7.0 4.7 銅板	空白文	紀前 17C後半	00027	陶器・砂	00027	銅器 小皿	3.9 4.6 11.3 銅板	空白文	紀前 17C	00077	
228	SK0532	銅器 小皿	— 3.5 — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00028	陶器・砂	00028	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00078	
229	1	銅器 小皿	10.6 10.6 11.7 銅板	空白文	紀前 17C後半	00029	陶器・砂	00029	銅器 小皿	11.2 5.7 4.8 銅板	空白文	紀前 17C	00079	
230	2	銅器 小皿	10.6 10.6 11.7 銅板	空白文	紀前 17C後半	00030	陶器・砂	00030	銅器 小皿	12.5 3.9 4.2 銅板	空白文	紀前 17C	00080	
231	3	銅器 小皿	12.5 12.7 12.4 銅板	空白文	紀前 17C後半	00031	陶器・砂	00031	銅器 小皿	14.0 4.6 4.3 銅板	空白文	紀前 17C	00081	
232	4	銅器 小皿	3.5 5.5 11.8 銅板	空白文	紀前 17C後半	00032	陶器・砂	00032	銅器 小皿	13.9 4.3 3.4 銅板	空白文	紀前 17C	00082	
233	5	銅器 小皿	— 15.1 — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00033	陶器・砂	00033	銅器 小皿	12.5 4.6 2.8 銅板	空白文	紀前 17C	00083	
234	6	銅器 小皿	— 15.1 — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00034	陶器・砂	00034	銅器 小皿	12.6 3.9 2.9 銅板	空白文	紀前 17C	00084	
235	7	銅器 小皿	20.4 15.2 14.2 銅板	空白文	紀前 17C後半	00035	陶器・砂	00035	銅器 小皿	12.7 4.2 3.7 銅板	空白文	紀前 17C	00085	
236	8	銅器 小皿	10.0 3.3 4.0 銅板	空白文	紀前 17C後半	00036	陶器・砂	00036	銅器 小皿	12.7 4.3 3.5 銅板	空白文	紀前 17C	00086	
237	9	銅器 小皿	6.7 5.4 10.8 銅板	空白文	紀前 17C後半	00037	陶器・砂	00037	銅器 小皿	12.6 4.3 4.1 銅板	空白文	紀前 17C	00087	
238	10	銅器 小皿	11.2 7.1 3.1 銅板	空白文	紀前 17C後半	00038	陶器・砂	00038	銅器 小皿	— 4.8 7.9 銅板	空白文	紀前 17C	00088	
239	11	銅器 小皿	21.8 7.2 3.2 銅板	空白文	紀前 17C後半	00039	陶器・砂	00039	銅器 小皿	— 4.8 7.9 銅板	空白文	紀前 17C	00089	
240	12	銅器 小皿	30.9 5.6 1.9 銅板	空白文	紀前 17C後半	00040	陶器・砂	00040	銅器 小皿	— 4.0 5.4 銅板	空白文	紀前 17C	00090	
241	SK0701	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00041	陶器・砂	00041	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00091	
242	SK0702	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00042	陶器・砂	00042	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00092	
243	SK0703	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00043	陶器・砂	00043	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00093	
244	SK0704	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00044	陶器・砂	00044	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00094	
245	SK0705	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00045	陶器・砂	00045	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00095	
246	SK0706	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00046	陶器・砂	00046	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00096	
247	SK0707	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00047	陶器・砂	00047	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00097	
248	SK0708	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00048	陶器・砂	00048	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00098	
249	SK0709	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00049	陶器・砂	00049	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00099	
250	SK0710	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C後半	00050	陶器・砂	00050	銅器 小皿	— — — 銅板	空白文	紀前 17C	00100	

第4表 魚沼町遺跡出土貨物一覧表①

資料の計量単位は本邦より変更し「中世の市」として一貫十匁の割合で換算する。
 尺貫法計量制度調査会 1994年による。

番号	銭名	出土遺跡	層位	レベル (m)	銭径A (mm)	B (mm)	内径C (mm)	D (mm)	銭厚 (mm)	重量 (g)	備考
1	寛永通宝 中層	黒色土	7.589	28.59	25.50	19.90	20.30	1.5	3.05	裏面「文」	
2	弘治通宝 中層	黒色土	7.586	22.10	22.15	18.9	18.60	1.0~1.20	2.85	1匁	
3	弘治通宝 中層	黒色土	7.444	—	—	—	—	1.45	0.65	1匁	
4	弘治通宝 中層	黒色土	7.468	23.35	23.10	19.15	18.80	1.09~2.0	2.85		
5	弘治通宝 中層	黒色土	7.463	22.90	22.90	17.80	18.00	1.20~1.30	2.60		
6	弘治通宝 中層	黒色土	7.488	22.65	22.65	18.60	18.65	1.20~1.50	2.60	1匁	
7	寛永通宝 中層	黒色土	7.426	24.30	24.30	18.60	19.80	1.60~1.70	3.4	占寛永	
8	寛永通宝 中層	黒色土	7.405	—	—	—	—	—	—	裏面「文」	
9	寛永通宝 中層	黒色土	7.403	24.60	24.60	19.20	18.80	1.80~1.90	3.4	占寛永	
10	寛永通宝 中層	黒色土	7.421	21.70	21.70	17.10	17.0	1.30~1.60	1.2	占寛永	
11	弘治通宝 中層	黒色土	7.476	—	—	—	—	1.45	1.2	破損	
12	弘治通宝 中層	黒色土	7.466	21.9	22.0	18.60	18.5	1.1~1.50	2.2		
13	弘治通宝 下層	黒色土	7.571	23.30	24.50	19.60	19.80	1.50~2.0	2.9	占寛永	
14	弘治通宝 下層	黒色土	7.566	24.0	—	20.3	18.6	1.20~1.50	1.95	占寛永	
15	弘治通宝 下層	黒色土	7.589	23.3	23.0	19.5	18.5	1.5	3.5	破損	
16	弘治通宝 下層	黒色土	7.597	—	—	—	—	—	—	破損	
17	弘治通宝 下層	黒色土	7.571	23.3	23.9	1.9	19.5	1.3~1.4	1.9	占寛永	
18	弘治通宝 中層	黒色土	7.444	22.15	22.1	1.66	18.0	1.2~1.4	2.0	裏面「文」	
19	弘治通宝 中層	黒色土	7.451	23.40	23.4	19.4	19.05	1.5~1.7	2.3	占寛永	
20	弘治通宝 中層	黒色土	7.367	22.70	22.65	19.3	19.3	1.2~1.3	2.2	占寛永	
21	弘治通宝 中層	黒色土	7.459	22.0	22.1	23.2	18.5	1.2	2.4	占寛永	
22	弘治通宝 中層	黒色土	7.441	23.4	23.9	18.8	16.6	1.7~1.8	2.5	1匁欠損	
23	弘治通宝 中層	黒色土	7.455	22.8	22.9	19.9	19.3	1.3~1.7	2.3	占寛永	
24	弘治通宝 中層	黒色土	7.457	22.95	22.0	19.2	18.1	1.3~1.6	2.85	占寛永	
25	弘治通宝 中層	黒色土	7.448	21.9	21.9	18.0	18.0	1.3~1.4	1.7	1匁	
26	弘治通宝 中層	黒色土	7.474	—	23.9	19.0	—	1.7~1.8	2.1	1匁	
27	弘治通宝 下層	黒色土	7.455	23.9	23.9	19.5	19.7	1.5~1.8	2.5	裏面「文」 部分欠損	
28	弘治通宝 下層	黒色土	7.545	22.5	24.8	19.30	19.3	2.4~2.8	2.8	裏面「文」 1匁欠損	
29	弘治通宝 下層	黒色土	7.545	—	—	—	—	—	—	破損	
30	弘治通宝 下層	黒色土	7.571	—	—	—	—	—	0.9	1匁	
31	弘治通宝 下層	黒色土	7.567	23.1	23.6	19.4	19.6	1.5	2.5	占寛永	
32	弘治通宝 下層	黒色土	7.531	—	22.0	18.5	—	1.9~2.3	1.1	1匁(下方向)	
33	弘治通宝 下層	黒色土	7.549	22.9	22.4	19.4	19.3	1.4	1.75	破損	
34	弘治通宝 下層	黒色土	7.491	22.6	22.4	19.3	19.3	1.5	1.8	1匁欠損	
35	弘治通宝 下層	黒色土	7.556	—	—	—	—	—	—	破損	
36	弘治通宝 中層	黒色土	7.556	22.9	22.4	18.6	18.6	1.3~1.4	2.1	占寛永	
37	寛永通宝 中層	黒色土	7.444	24.4	24.0	20.0	19.6~1.95	2.8	—	占寛永	
38	寛永通宝 中層	黒色土	7.505	24.1	23.6	19.6	19.7	1.7	2.79	占寛永	
39	弘治通宝 中層	黒色土	7.531	22.5	24.7	19.3	19.8	2.0~2.4	2.19	占寛永	
40	弘治通宝 中層	黒色土	7.431	22.2	22.4	18.3	18.3	1.3~1.5	2.2	占寛永	
41	弘治通宝 中層	黒色土	7.531	21.9	22.1	18.3	18.3	1.2~1.3	20.5	破損	
42	弘治通宝 中層	黒色土	7.430	24.5	24.2	20.6	20.7	1.6~1.9	3.1	占寛永	
43	寛永通宝 中層	黒色土	7.421	24.2	24.2	19.6	19.8	1.2~1.7	2.6	占寛永	
44	寛永通宝 下層	黒色土	7.577	23.3	23.6	19.5	19.0	1.6	3.3	占寛永	
45	寛永通宝 下層	黒色土	7.591	24.3	24.3	19.4	19.4	1.9~2.0	3.4	占寛永	
46	弘治通宝 中層	黒色土	7.465	—	22.5	—	—	18.6	1.7	占寛永	
47	弘治通宝 中層	黒色土	7.569	22.8	22.7	18.5	18.6	1.6	2.9	占寛永	
48	寛永通宝 中層	黒色土	7.769	24.3	24.2	18.7	18.9	1.2~1.4	5.2	占寛永	
49	寛永通宝 中層	黒色土	7.617	24.0	24.1	19.4	19.0	1.4	2.6	占寛永	
50	弘治通宝 中層	黒色土	7.473	23.9	23.9	19.8	18.8	1.8~2.0	2.7	占寛永	

表 魚屋町遺跡出土錢貨一覽表②

[illegible]

第6表 魚屋町遺跡出土錢貨一覽表③

番号	線 名	出土遺構	層 位	レベルA (m)	B (m)	内径C (m)	D (m)	底 野 (m)	備 考
251	不明	溝見中		—	—	—	3.0—1.1	1.7	
252	不明	溝見中		—	—	—	—	1/4寸	
253	不明	溝見中		—	—	—	—	1/2寸	
254	不明	溝見中		—	—	—	—	1/4寸	
255	一銭 (7)	溝見中		—	—	—	—	磨玉行	
256	寛永通宝	中層中継部	陶器土	24.20	24.20	20.40	20.20	1.4—1.45	3.5
257	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
258	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
259	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
260	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
261	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
262	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
263	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
264	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
265	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
266	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
267	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	—	—	—	—	—	
268	溝式瓦葺	中層東端部	陶器土	22.30	22.30	—	—	1.2—1.5	3.2
269	手瓦	高直型		22.30	22.30	—	—	—	[大日本・明治十一年]

[illegible]

魚屋町地区)

番号	異 名	出土場所	場 位	レベル (m)	残存A (m)	B (m)	内径C (m)	D (m)	筒 厚 (g)	備 考	
201	河成遺文	火災跡中	火災跡	21.80	22.00	18.60	10.05	1.2~2.0	3.2		
202	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	22.85	25.30	20.10	10.70	1.2~1.4	3.0	古銅系	
203	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	25.50	25.50	20.10	10.80	1.4~1.7	4.5	新銅系	
204	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.40	24.40	19.55	10.55	1.6~1.8	2.2	新銅系	
205	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	23.70	23.90	19.55	10.40	0.9~1.2	2.0	新銅系	
206	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.40	24.40	21.10	20.50	1.7~1.8	3.6	新銅系	
207	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	—	25.40	—	19.70	1.4~1.45	3.4	古銅系	
208	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	28.50	24.90	19.30	19.80	1.8~1.4	3.4	新銅系	
209	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.60	24.80	19.50	19.20	1.3~1.6	4.0	新銅系	
210	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.10	24.30	20.25	20.40	1.6~1.8	3.8	新銅系	
211	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.50	23.85	20.00	18.60	1.45~1.6	3.5	新銅系	
212	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.55	24.60	19.80	19.90	1.3~1.4	3.0	新銅系	
213	徳永遺文	火災跡跡留面	火災跡	21.90	21.60	19.50	18.40	1.4~1.45	2.4	新銅系	
214	不明	火災跡跡留面	火災跡	—	—	—	—	—	1.1		
215	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.55	24.20	19.30	18.80	1.3~1.4	2.3	古銅系	
216	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.95	25.25	20.30	20.80	1.4~1.5	2.7	古銅系	
217	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	—	—	—	—	—	2.1	古銅系	
218	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	—	—	—	—	—	1.8	新銅系/2片	
219	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	—	—	—	—	—	2.2	新銅系/2片	
220	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	—	—	—	—	—	2.9	新銅系/2片	
221	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	22.8	23.8	19.5	19.5	1.0~1.3	3.0	新銅系	
222	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	22.4	22.9	17.4	17.1	1.3~4.5	2.15	古銅系	
223	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	—	—	—	—	—	1.45	1/4片	
224	不明	火災跡跡留面	火災跡	—	25.40	—	19.4~1.4	—	1.0	1/4片	
225	不明	火災跡跡留面	火災跡	—	—	—	—	—	0.8	1/4片	
226	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	23.50	25.00	20.45	20.55	1.2	2.7	新銅系	
227	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	23.40	25.30	20.40	20.45	1.4~1.7	3.5	新銅系	
228	寛永遺文	火災跡跡留面	火災跡	24.80	25.10	20.80	20.15	1.4~1.5	2.5	新銅系	
229	河成遺文	敷土跡	銅色土	23.85	24.90	20.20	19.70	1.7~1.8	2.4	新銅系(?)、銅進行	
230	寛永遺文	火災跡中	火災跡	—	—	—	—	—	—		
231	寛永遺文	中層	銅色土	24.50	24.40	20.40	20.70	1.1~1.2	3.0	新銅系	
232	寛永遺文	中層	銅色土	24.65	24.00	20.45	20.15	0.9~1.2	2.7	新銅系	
233	寛永遺文	中層	銅色土	24.50	24.00	19.80	19.90	0.9~1.2	2.8	新銅系	
234	寛永遺文	中層	銅色土	24.60	24.50	20.05	20.2~1.4	3.4	新銅系		
235	寛永遺文	中層	銅色土	24.45	24.30	19.70	18.80	1.2~1.3	3.4	新銅系	
236	寛永遺文	中層	銅色土	—	—	—	—	—	—		
237	寛永遺文	中層	銅色土	—	—	—	—	—	—		
238	河成遺文	中層	銅色土	—	—	—	—	—	—		
239	寛永遺文	中層	銅色土	—	—	—	—	—	—		
240	寛永遺文	中層	銅色土	24.35	24.45	20.05	20.85	1.4~1.45	2.7	新銅系	
241	寛永遺文	中層	銅色土	25.50	25.25	20.10	20.25	1.1~1.2	3.2	新銅系	
242	寛永遺文	中層	銅色土	24.45	24.05	19.40	18.85	1.3~1.45	2.3	古銅系	
243	寛永遺文	中層	銅色土	24.50	24.00	19.80	19.90	1.2~1.4	2.4	新銅系	
244	寛永遺文	中層	銅色土	22.25	22.20	19.90	19.85	0.8~0.9	2.2	新銅系	
245	不明	中層	銅色土	—	—	—	—	—	0.8~0.85	1.9	新銅系
246	河成遺文	中層	銅色土	22.60	22.40	19.60	18.80	1.45~1.5	2.9	新銅系	
247	寛永遺文	中層	銅色土	22.10	22.05	16.05	16.05	1.1~1.2	1.3	新銅系	
248	寛永遺文	中層	銅色土	24.90	24.90	19.70	19.50	1.1~1.2	3.0	新銅系	
249	河成遺文	中層	銅色土	24.70	24.70	18.35	18.30	1.2~1.3	3.1	古銅系	
250	河成遺文	中層	銅色土	22.20	22.20	19.20	18.30	1.3~1.45	2.3	1部欠損	

V. 第 2 次 調 査

1. 遺構の概要

第2次調査では、魚屋町筋の西側における屋敷割り状態を確認することに主眼を置いた。まず、調査区の北側に土層確認トレンチを設けて、土層状態を把握した。標準となる土層に基づいて、調査区を上・中・下の3層に分割して順次発掘作業に移った。上・中・下層の平均標高は、約8.1・7.6・7.1mを測

り約50cmの間隔で掘り下げた結果となった。

【上層】

上層で検出した遺構は、建物2棟、井戸3基、溝4条、土坑5基とピットである。

建物は調査区の北西部と南東部で検出した。建物の全容は検出できなかったが、2棟とも東西棟である。

S B 23は柱の基礎に30～40cmの方形の石を有する。残存する基礎石による建物の規模は、東西5.5m×南北5mである。基礎の間隔は1間＝約2mとしているようだ。建物は魚屋町筋に面していたと考えられるため、建物を復元すると、東西12間×南北2.5間程になろう。

S B 30も基礎石とその抜き跡が検出された。東西4m×南北3m分である。北側の柱筋が建物の外壁となる部分で、規模を推定することは不可能である。(第34図)

井戸は3基とも調査区の北側で検出した。

S E 1は内径74cmで、周囲に漆喰を幅10cmの厚さで塗り固めている。漆喰の外周は瓦を積み重ねる。漆喰は井戸からS K 4に連続して塗られており、S K 4とは一連の遺構と考えられる。(第36図)

S E 2も漆喰で塗られた井戸で、内径76cm、漆喰厚5.5cmを測る。漆喰の外周は5cm大の円礫を混入させている。(第37図)

S E 3は上部のみを漆喰を用い、井戸本体は瓦・板状の割り石を小口積みする。内径は67cm前後である。検出面から約2.8mの深さで、桶状に組んだ木枠が出土した。湧水が著しく、木枠の径および枠をなす板材の枚数など計測できなかった。ただし、抜き取った板材は

幅10～12cm、長さ88～92cm、厚さ1.8～2.3cmである。(第37図)



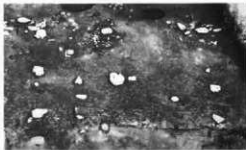
第31図 上層検出遺構全景(南から)



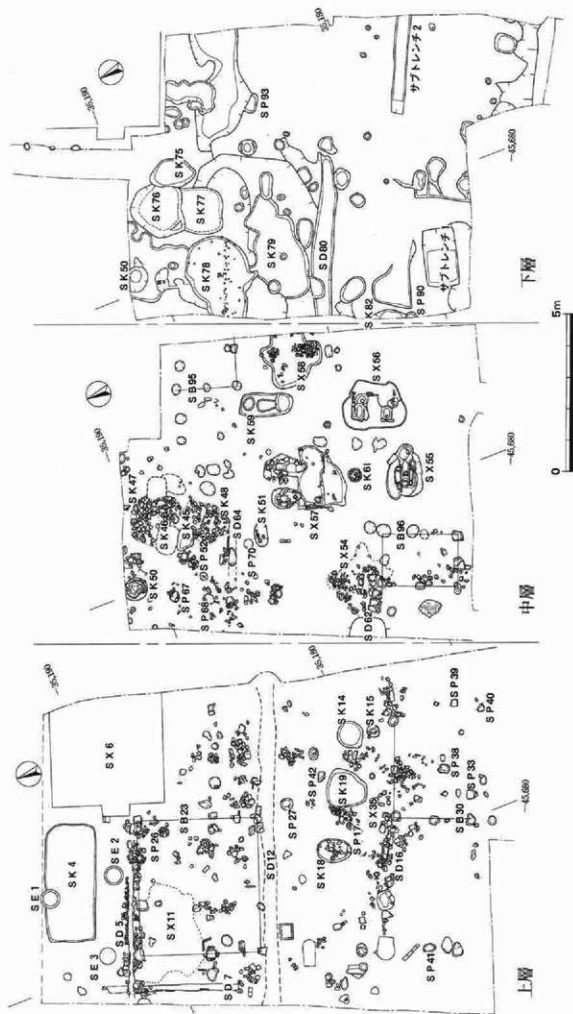
第32図 中層検出遺構全景(南から)



第33図 下層検出遺構全景(南から)



第34図 S B 30(南から)



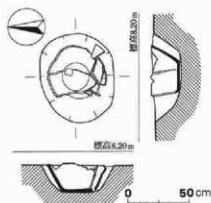
第35図 上・中・下層：遺構配置図 (1/150)



第36図 SE1・SK4 (西から)



第37図 SE2・3SD5 (西から)



第38図 SK15実測図 (1/30)

溝は4条検出したが、内3条が東西走向である。

SD5は東西溝で、幅15~25cm、検出長5.5mを測る。溝の北壁は瓦を立てて裏込めには10~15cm大の円礫を用いる。南壁は板状の礫の小口を当てている。溝底面は漆喰を丁寧に塗り、東から西へ流水の方向を定めている。

SD7は南北溝で、溝底面の漆喰と西壁面に使用の直立した平瓦の検出に留まった。流水方向は北から南である。

SD12の直上には後世の基礎が入り、調査区の中央付近で溝の跡を辛うじて認めた。規模や状態等は不明である。

SD16は調査区に南側で検出した。溝幅は約20cmで、検出長は4.5m程である。壁面状態はSD5と逆で、南壁面に瓦を立て、北壁面は礫を用いている。後世の基礎が直上に乗り、残存状態は良くない。(第39図)



第39図 SD12・16 (南上空から)



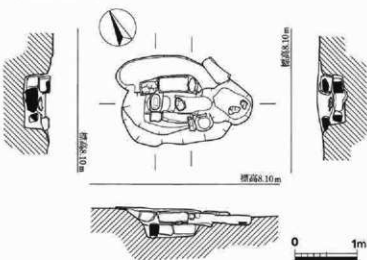
第40図 SX6 (東から)

土坑SK13・18は廃棄土坑である。共に陶磁器、瓦、礫、砂、焼土が混在する。また、SK14は円形を呈し、周囲を漆喰で塗り固めている。深さは20cmで浅く、底面の漆喰は割られている。

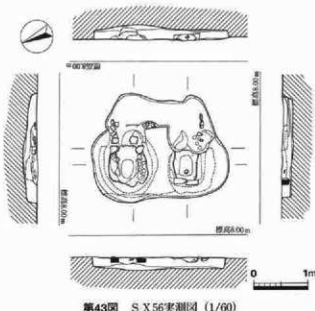
SK15はSK14の南隣で検出し、陶器の甕が正立状態で出土した。(第38図)



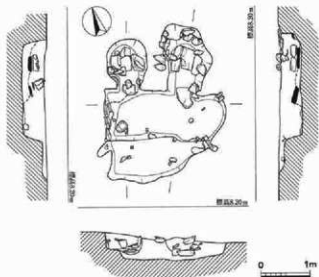
第41図 SX55 (東から)



第42図 SX55実測図 (1/60)



第43図 SX56実測図 (1/60)



第45図 SX57実測図 (1/60)



第46図 SX57 (南から)

燃焼部は割り石が落ち込み、A・B共に石組みであったと思われる。Aの主軸はN-19° 30' -Eで、BはN-27° 30' -Eである。(第45・46図)

溝は調査区の西側で検出した。SD62は両側の壁面に割り石の小口を用いる。溝幅20cm、検出長2m



第44図 SX56 (東から)

SX6は大正～昭和初期の料亭『丸嘉』の半地下倉庫である。(第40図)

SX11は不整形に広がる焼けた砂の範囲でSB23・SD5よりも古い。砂は紫褐色を呈し、砂面の厚さは3～5cmと薄い。

【中層】

中層で検出した主な遺構は、建物2棟、竈3基、溝2条、土坑7基である。

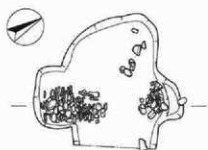
建物はSB95を北東隅で、SB96を南西隅で検出した。前者は東西柱筋1.5m分、南北柱筋2.5m分後者は東西柱筋2m分、南北柱筋3m分で、共に全容の検出には至らなかった。板状の基礎石を使用。

竈は、調査区中央で3基検出した。その内2基が2連式竈の形態をなす。使用目的は不明である。

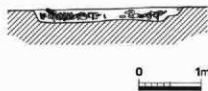
SX55は東に焚き口、西に燃焼部を有する。燃焼部には幅25cm、長さ45cmの直方体の阿蘇凝灰岩を両側に配し、竈の壁面を構成する。底面には灰が5～10cmの厚さで堆積する。主軸はN-65° -Wを示す。(第41・42図)

SX56はA・Bの竈が南北に並び、焚き口を東に置く。燃焼部は共に長方形を呈する。Bは焚き口の両側に安山岩を1個ずつ添える。BがAよりも若干大きめの構造を有する。N-67° 30' -Wに主軸を示す。(第43・44図)

SX57は燃焼部よりも一段低い床面の焚き口を南に持ち、西壁は割り石を立て強固にするが、東壁は素掘りのままである。



第47図 SX58実測図 (1/60)



第48図 SX58 (東から)



第49図 SX78 (東から)

である。SD64は割り石を溝の壁面と底石に使用している。幅27cm 検出長2.2m、深さ8cmを測る。

土坑は7基とも廃棄坑

の性格が強い。

SX58は円礫・割り石を立てて東西方向に並べたもので、性格は不明である。土坑は十字形を呈するが、集石は南北に配され、土坑の重複も考えられる。集石



第49図 SX78 (東から)

は一部欠けているが、長さは約2mに及ぶ。(第47・48図)

【下層】

土坑・溝などを検出した。多くは直上層の遺構の掘り込みである。

SK78は不整形であるが、黒褐色の粘質土の埋土を有する。底面は平坦で、18cmの深さで黒色の粘土層(泥炭層)に至る。土坑内から木杭が56本出土し、長さ3.3m、幅0.6mの帯状に48本の杭が東西方向に密集する。坑内から絵唐津が出土。(第49図)

2. 遺物の概要

出土遺物は、パンコンテナで約70箱に及ぶ。遺物については後頁の図版と遺物観察表を以て説明に代えたい。

3. まとめ

当初の目的であった屋敷割りの区画溝を検出できたことが大きな成果と言えよう。城下町遺跡における従来の調査において、

今回ほど明瞭に確認できた例はない。以下、層毎に屋敷割りについて、若干考察を加えたい。

上層(江戸後期～幕末)……SD5-SD12-SD16の間隔は5m・4.4mである。2間半と2間の間口で奥行きは13間(26m)の敷地が町人の屋敷地と考えられる。

中層(江戸中期)……SD62-SD64の間隔は5mで、2間半の間口である。

下層(江戸初期)……木杭列が境界を表すものか不明である。城下町建設(1621)以前の杭の可能性もある。

上層境界と中層境界を比較すると、SD16とSD62は同一箇所にあり、長く踏襲された溝と言えよう。しかし、SD64は踏襲されず、間口が狭まりSD12に移行している。江戸期は頻繁に境界の移動が行われていたのか、火災の復興の際に境界移動が行われたのか、その原因は判然としない。今後の調査例を俟って検討したい。魚店が立ち並ぶ江戸時代の状況を復元することに、一筋の光が差し込んだようだ。

銭貨名	上層出土枚数	中層出土枚数	下層出土枚数	備考
寛永通寶(古)	23	39	11	1835年初銭
寛永通寶(新)	50	3	1	1897年初銭
文久永寶	1			1863年初銭
無年元寶	2	1	2	北条氏 1066年初銭
元亨通寶	1		1	北条氏 1078年初銭
元符通寶	1	1	1	北条氏 1096年初銭
元祐通寶		1		北条氏 1096年初銭
洪武通寶	5	53	16	明銭 1368年初銭
永樂通寶			1	明銭 1408年初銭
銭銭	1			
不明	2	2		

第7表 層別における銭貨出土一覧表



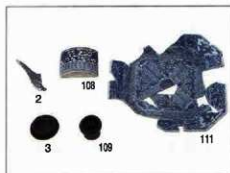
(1) S X 6出土遺物



(2) S X 11出土遺物



(3) S K 13出土遺物



(4) S K 4・18・19出土遺物



(5) S D 5・7・12出土遺物



(6) S P 17・27・33・42出土遺物



(7) S K 50出土遺物



(8) S K 55・56・57出土遺物



(9) S X 58・S D 62・S K 63出土遺物



(10) S K 77・S D 80出土遺物



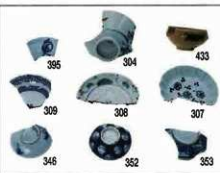
(11) S K 78出土遺物



(12) S K 82出土遺物



(13) 上層包含層出土遺物①



(14) 上層包含層出土遺物②



(15) 上層包含層出土遺物③



(1) 中層包含層出土遺物①



(2) 中層包含層出土遺物②



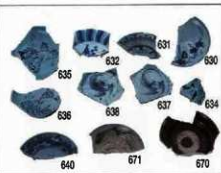
(3) 中層包含層出土遺物③



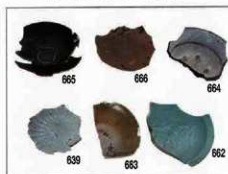
(4) 下層包含層出土遺物①



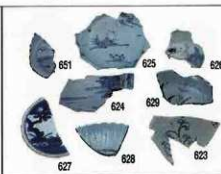
(5) 下層包含層出土遺物②



(6) 下層包含層出土遺物③



(7) 下層包含層出土遺物④



(8) 下層包含層出土遺物⑤



(9) 下層包含層出土遺物⑥



(10) 中層包含層出土遺物⑦



(11) 明妻燒



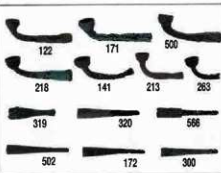
(12) 明妻燒鉢



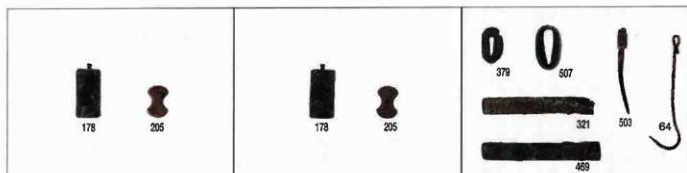
(13) 東野亭燒



(14) 中國陶磁器



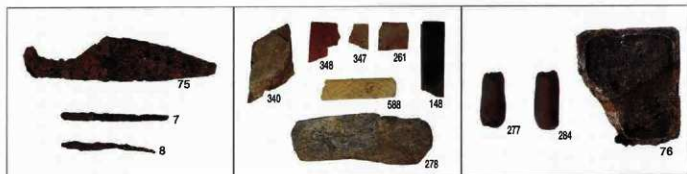
(15) 煙管



(1) 分銅 (表)

(2) 分銅 (裏)

(3) 銅製品



(4) 鉄製品

(5) 砥石

(6) 土師・硯



(7) 土鈴

(8) 埴物人形①

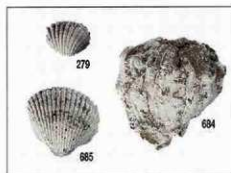
(9) 埴物人形②・埴笛



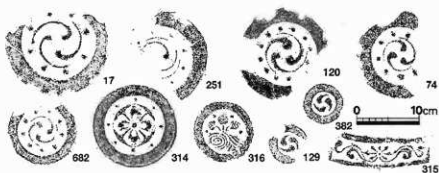
(10) 面子

(11) 簪・滑車・硯石・基石

(12) ガラス瓶



(13) 貝殻



第53図 出土瓦拓影

第52図 出土遺物③

第7表 魚屋町2次遺物一覽表①

[illegible]

第8表 魚屋町

項目・書名	著者	原 稿	注 量	文 種	施	著者	年 代	所 在 地	備 考
136	SK47	昭和 安	6. 32 (4.6) 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001356
137	SK47	昭和 中	7.6 (3.6) 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001357
138	SK47	昭和 中	7.2 4.5 6.0 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001358
139	SK47	昭和 大入	6.9 (5.0) 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001359
140	SK48	昭和 中	11.0 — 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001360
141	SK48	昭和 中	14.0 — 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001361
142	SK48	昭和 中	9.1 4.0 8.2 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001362
143	SK48	昭和 中	8.5 4.0 8.2 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001363
144	SK48	昭和 中	— 4.6 (4.0) 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001364
145	SK48	昭和 中	9.1 4.0 8.2 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001365
146	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001366
147	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001367
148	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001368
149	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001369
150	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001370
151	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001371
152	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001372
153	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001373
154	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001374
155	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001375
156	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001376
157	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001377
158	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001378
159	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001379
160	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001380
161	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001381
162	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001382
163	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001383
164	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001384
165	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001385
166	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001386
167	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001387
168	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001388
169	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001389
170	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001390
171	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001391
172	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001392
173	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001393
174	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001394
175	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001395
176	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001396
177	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001397
178	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001398
179	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001399
180	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001400
181	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001401
182	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001402
183	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001403
184	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001404
185	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001405
186	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001406
187	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001407
188	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001408
189	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001409
190	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001410
191	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001411
192	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001412
193	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001413
194	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001414
195	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001415
196	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001416
197	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001417
198	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001418
199	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001419
200	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001420
201	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001421
202	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001422
203	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001423
204	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001424
205	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001425
206	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001426
207	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001427
208	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001428
209	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001429
210	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001430
211	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001431
212	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001432
213	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001433
214	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001434
215	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001435
216	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001436
217	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001437
218	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001438
219	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001439
220	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001440
221	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001441
222	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001442
223	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001443
224	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001444
225	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001445
226	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001446
227	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001447
228	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001448
229	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001449
230	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001450
231	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001451
232	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001452
233	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001453
234	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001454
235	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001455
236	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001456
237	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001457
238	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001458
239	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001459
240	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001460
241	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001461
242	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001462
243	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001463
244	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001464
245	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001465
246	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001466
247	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001467
248	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001468
249	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001469
250	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001470
251	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001471
252	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001472
253	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001473
254	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001474
255	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001475
256	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001476
257	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001477
258	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001478
259	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華	昭和17年銀行	見込	昭和	内蔵文庫蔵	001479
260	SK48	昭和 中	15.0 4.4 3.7 昭和	和・華					

第9表 魚屋町2

[illegible]

[illegible]

Ⅵ. ま と め

本章では第1・2次調査の成果を基に、近世の魚屋町の一部についてはあるが概観し、まとめたい。

1. 魚屋町の成立

久留米城下町の本格的な整備は元和7年(1621)有馬豊氏が筑後国北半を領し、久留米城を本拠としたことに始まる。前代の田中吉政・忠政親子の頃に久留米城を中心として、柳原・元町・内町・長町・三本松町・洗切などの町屋が存在する小規模な城下町があったものらしいが、その実態は明らかではない。

今回の調査で検出された遺構の中で田中氏代に属すると推定されるものは、築島地区SX92である。この遺構は今回の調査では時期を明確にし得なかったが、17世紀前半代には埋没しており、その時期や検出状況から判断して、呉服町遺跡SX5と一連のものである可能性が高く、田中氏代の城下町に関連する溝、もしくは堀と想定される。調査地付近は南に所在する池町川から延びる低地に当たり、現在でも周辺の台地部分とは約2mの比高差を示す。現地表からSX92検出面までは約2.2mを測り、当時台地部分との比高差がもっと大きく、SX92検出面より約30~50cm上位の面で検出した下層の遺構群からは17世紀中~後半代の遺物が出土すること、さらに寛政8年(1796)の宮原東平の記述に「宮原大膳久留米柳原二住、家来二人、魚商人となる。有馬氏代、西魚屋町へ移る」とあることなどを考慮すれば、田中氏代のこの地は低地として余り利用されることはなく、元和7年以降に土地の嵩上げなどが行われ、町屋が整備されたものと判断される。なお、今回SD1を検出したことにより、北側の亀屋町から南の田町方面へ延びる幅4m(約2間)の南北道路の両側に広がる魚屋町は、呉服町遺跡で検出された南北溝SD11とSD1の間、東西55mの範囲を有することが判明した。

2. 西魚屋町上ノ丁の屋敷割

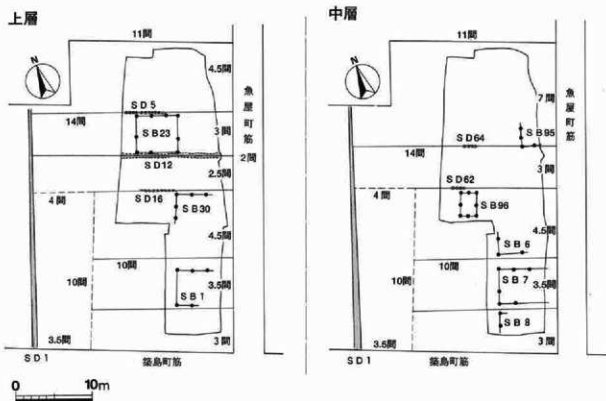
調査地は大正時代の土地台帳「久留米市土地実典」を参照すると、魚屋町上ノ丁の西側、及び築島町字中筋の北側東端部に相当する。調査対象地の南限は東方約200m付近に現存する旧御使者屋跡の石垣南側のラインを西側に延長した線上にあり、東限は調査地東側を通る南北道路が魚屋町筋を踏襲しているものと見られ、調査地と現在の道路との境界がそのまま町屋と道路との境界を示すものである可能性が高いため、対象地の南東隅、現在の東西道路と南北道路とが交差する地点を上ノ丁西側の南端とした。その地点から魚屋町と両替町との境となる41m北側の部分までを調査しており、調査成果を基に、近世後期に当たる上層・同中期に当たる中層段階について西魚屋町上ノ丁の屋敷割を推定したのが第56図である。



第54図 明治時代の屋敷割図



第55図 「久留米市土地実典」



第56図 西魚屋町上ノ丁屋敷割推定復元図 (1/400)

まず、上層段階についてであるが、第1次調査では18世紀後半代頃、第2次調査では近世後期～幕末と若干時期が異なっているが、魚屋町地区では寛政11年（1799）11月に築島町・今町の90軒を焼く火災以降は幕末に至るまで災害等によってこの付近の屋敷割が大きく変化する要因はないものと判断し、1間を6尺4寸（194cm）として推定した屋敷割が第56図左側の図である。南西部に南北に長い区画が見られるが、この屋敷割は第54図に掲げた明治時代の字図にも示されており、この部分は魚屋町筋ではなく築島町筋に面しているため、南面を表とした土地利用がなされたものであろう。但し、この部分は未調査であるため、第1次調査終了時まで残されていた南北棟建物の境界を参考に推定し、破線で示した。また、南端から北側3番目の区画は間口4.5間としたが、第1・2次調査トレンチの境界未調査部分に当たり、間口2間半程度の2区画となる可能性もある。北端部については大正期頃の半地下倉庫などによって混乱され情報がないため一応間口4間半とした。奥行は南半部が10間、中央の2区画は魚屋町筋が22度東偏するのに対し、SD1が20度東偏と厳密には並行でないため、北側へ行くほど魚屋町筋とSD1の間隔が若干開き、13間半から14間を示す。

第56図右側は17世紀後半代～18世紀前半代頃の屋敷割り推定復元したものである。これは享保11年（1726）通称田代火事が原因と推定される火災層の除去後に検出した遺構群から復元したもので、第2次調査で屋敷境の溝が若干北側へ移動していることを勘案しても、屋敷割自体には特に大きな変更は見られない。第1次調査下層においても一部を検出したのみながら、基礎石はほぼ同じ位置で検出されていることなどから推定すれば、西魚屋町上ノ丁については、城下町建設段階から基本となる屋敷割は余り変更されることなく、幕末迄続いていたものと考えられよう。

報告書抄録

ふりがな	くるめじょうかまち うおやまちいせき だい1・2じょうさ						
書名	久留米城下町 魚屋町遺跡 第1・2次調査						
編著者名	水原 道範 園井 正隆						
編集機関	久留米市教育委員会						
所在地	〒830 福岡県久留米市城南町15-3 TEL0942-30-9225						
発行年月日	1997年1月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査の原因
魚屋町遺跡 うおやまちいせき	福岡県久留米市 城南町13-21他 6事 ふくおかけんく るめし じょうなんまち	40203	33度 18分 59秒	130度 30分 33秒	1次 19960207～ 19960610 2次 19960925～ 19961121	1次 458㎡ 2次 265㎡	事務所建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
魚屋町遺跡 第1次調査	町家跡	江戸	南北溝 1条 土坑 27基 井戸 5基 溝状遺構 1 礎石建物 4棟		近世陶磁器 瓦類 古銭、煙管 木製品	魚屋町と築島町の町境溝を検出。魚屋町の東西範囲を確定。	
第2次調査	町家跡	江戸	礎石建物 4棟 井戸 3基 溝 6条 土坑 13基 竈 3基		近世陶磁器 瓦類 古銭、煙管 銅製品	魚屋町筋西側の近世屋敷境の溝を検出。	

久留米城下町

魚屋町遺跡 第1・2次調査

久留米市文化財調査報告書 第123集

平成9年1月31日

発行：久留米市教育委員会

〒830 久留米市城南町15-3

編集：文化庁文化財保護課

〒830 久留米市城南町15-3

☎ 0942-30-9225

印刷：株式会社 東広

〒839 久留米市御井旗崎5-1-20

☎ 0942-43-9513